

## H PCR陽性だが最期を家で過ごしたいと退院を希望する末期がんの方

肺癌末期、骨転移、脳転移の68歳男性のHさん。余命3ヶ月と告知を受けている。酸素2リットル使用中。骨転移による痛みの増強のため、緩和的放射線照射にて入院していた。放射線療法が終わり、痛みが緩和され歩行が出来るようになったため退院の予定だった。

しかし、同室の患者が退院予定日の6日前の夜に発熱、翌日朝PCR検査を行い、夕方陽性と判明。Hさんは同室者であったため濃厚接触者とみなされ複数回PCR検査が実施され、退院前日にPCR陽性と判明した。症状は何もなく呼吸器症状の悪化も見られなかったが、主治医は肺癌末期でもあり、重症化のリスクが高く退院は許可できないと伝えた。

しかし、Hさんは入院中面会制限のため家族と会えなかったため、どうしても退院したかった。感染したことでこのまま退院できずに、病院で最期を迎えなければならないことへの恐怖があった。主治医にこのまま家族に会わずに最期を迎えるかもしれないことはしたくないと退院を懇願した。同居の息子夫婦も退院を希望しており、在宅チーム(主治医、ケアマネ、訪問看護)に相談があった。

# H 討議ポイント

- 1 本人の希望をかなえ、予定どおり在宅ケアを開始する場合、在宅チームはどのような体制や連携をとるか？どのようなことに注意する必要があるか？
- 2 法的には、リスクファクターのある軽症者は入院が必須であるが、入院中にPCR陽性となった末期癌患者さんの強い自宅療養の希望をACPの観点からどのように考えるか？